

スチャート・サワッシー編
SUCHART SAWADSIRI

現代タイ国短編小説集

上 卷

岩 城 雄次郎 訳

タイ叢書 文学編 23



井村文化事業社 発行
勁 草 書 房 発売

スチャート・サワッシー編

現代タイ国短編小説集 上巻

岩城雄次郎訳

井村文化事業社

訳者紹介

岩城雄次郎（いわき・ゆうじろう）

1935 東京に生まれる。

1960 東京外国語大学タイ語科卒業。

1970—1977

タイ国チュラロンコン大学文学部客員講師として日本語を教えるかたわら、タイ文学を研究。タイの短篇小説を20篇、詩を6篇、民謡を15篇翻訳。

1978 東京外国語大学非常勤講師としてタイ文学概論を担当、外務省研修所のタイ語講師を兼任。

1979 産業能率短期大学の専任助教授として語学教育を担当、東京外国語大学非常勤講師を兼任、現在にいたる。

＜著書、訳書、論文＞

“Rian phund Phaasaa Jiipun”（著書）、『実用タイ語会話』（共編）、『ウワーンはどこへ行ったの』（訳書）、セーニー、サウワボン作『妖魔』（訳書）。主要論文は『73年政変とタイ文学』、『微笑の国の新しい顔』、『微笑を失いかけた独立王国』

現住所：〒167 東京都杉並区清水1-23-23

現代タイ国短編小説集 上巻

＜タイ叢書文学編23＞

1982年10月15日 第1刷印刷

1982年10月25日 第1刷発行

編者 スチャート・サワッシー

訳者 岩城雄次郎 ©

発行所 株式会社 井村文化事業社

東京都渋谷区道玄坂2-16-3

発売所 株式会社 勁草書房

東京都文京区後楽2-23-15

電話 03-814-6861

振替 東京 5-175253

落丁・乱丁本はおとりかえします

製版／清水印刷 印刷／港北出版印刷 製本／谷島製本

目次

1	いつもとは違った日	ウィッタヤコン・チエンクーン	1
2	人には頼らず	マイトリリー・リムピチャート	11
3	早 魃	スラチャイ・チャンティマートン	20
4	ミス・タイランドの最終審査	アヌット・アーパーピロム	26
5	その日ついに	サティアン・チャンティマートン	35
6	寄付集め	ニミット・プーミターウォン	40
7	ドウアンという女	コーン・クライラート	47
8	チョーイの最後	ウィットテープ・ルーチャーリット	53
9	ソムブンは負けないぞ	カモン	61
10	失われたもの	パイトゥーン・サックナー	65
11	エムオン嬢のひたすらな愛	アーサー	71
12	にせ医者	ラーオカムホーム	80
13	川のある町	アーチン・パンチャパン	87
14	父	シーダオルアン	94
15	玩具の列車	スチャート・サワッシー	103

1 いつもとは違った日

ウィッタヤコン・チエンクーン

あの人たちは、トーンムアンがこれまでに見たこともない橙色の大型車に乗り込み、まるでこぼこ道のせいでもあるかのような調子っぱずれの歌をがなりたてながらやって来たのだった。

「民族の共同社会を発展させよう、おいらはそのためやって来た。……」

彼等は大きな声で、まるで全世界に告げ知らせようとでもするかのように、何度も何度もこう叫び立てていた。

トーンムアンは、この歌のメロディーそのものをぜんぜん耳にしたことがなかったが、すでに聞き覚えているかのように加え、この歌は直観的に他の何よりも心理的快感や親近感を呼び起こしつつ、彼女を深い共感に誘い込むのだった。

車がかかるべき位置にピタリと止まると、彼等は三々五

々降り始めた。皆若い男女ばかりで、それぞれ非常に似通ったズボンをはき、帽子をかぶっている者もいた。遠くから見たところでは、トーンムアンにはそれが男でそれが女なのかよく見当がつかないのだった。彼女はおずおずと歩み寄って行き、半ば恐れながらも好奇心に駆られつつ、彼等の様子を窺うことにした。

彼等は、車から降りてしまうと、男も女も皆それぞれの格好で手足を伸ばしながら、いかにも興味深そうに周囲を見回すのだったが、トーンムアンには彼等がいったい何をそんなに見つめているのか、とんと理解できなかった。というのには、彼女自身どこをどう見回したって、今やすっかり乾き切った田圃以外は何も見当らないのだから。彼女の住む村はもう古いものだし、寺は小さく、学校といえはごくありふれた木造で、日ごろ見なれた屋根と床以外は何もないのだ。

娘さんの一人が仲間のもう一人に、こんな風に言っているのを聞いて、彼女はびっくりした。

「まあ、ここはなんてすばらしい気候でしょう！」

こんな表現は、彼女にとって少なからず奇妙に思える。というのは、彼女が生まれ、かれこれ十二、三年も育ってきたこの村で、誰一人こんなことを言ったためしがないか

らである。

ミー村長が彼等を迎えに出て来た。その物腰から見ても、若者たちの代表格とおぼしき一人が進み出ると、村長に挨拶をし、何ごとかを話し合った。

トーンムアンぐらいの年ごろの子供たちにとって、ミー村長はずっと以前から村でいちばん尊敬すべき人物のように思われてきた。というのは、政府が彼を村民の長として任命したわけで、誰でも皆彼の言うことを聞かねばならなかったからである。しかし、今日という日は、彼にその村長という貫禄がまったく欠けていた。あんなに若い連中と、まるで政府のお偉方と向き合ったときのような調子で話し合っているのだから。

トーンムアンは恐怖にうち震えた。もしもあの人たちが皆政府のお偉方なら、どうして五、六十人も連れだって来たのだらう。たった二、三人の偉い役人が来ただけでも村中がひっくり返るほどの大騒ぎになるということを、子供ながらも彼女は知っていたのだが、彼等は正にひとつの大集団をなしてやって来たのだった、彼等がスーツケースを持ち、ミー村長の後について学校まで歩き始めたので、どうやらそこへ泊り込むつもりなのだらうと分かった。が、彼女は、どうして彼等がこんなところに来て宿を取る

のか、不思議に思わざるをえなかった。というのは、いまだかつて偉い役人でこんなところへ泊り込みに来た者はなく、彼女の村では、夜は真つ暗闇以外は何も見えず、コロギと風の音以外何も聞こえてきほしくないからである。

この村には、知的好奇心に満ちている彼女の心の問いかけに対して解答を与えてくれるような人は誰もいなかった。父には、それがどんな質問であれ、答えてもらえるような暇がなく、母はといえば、日常の雑事に追われていて疲れるばかり、自分の娘のことに頓着する余裕はなかったし、「学校の先生」はあまりにも恐いので、誰もあえて近づこうとしなかった。そして、当然話のよく分かっているはずのミー村長は、あの連中に米や水を調達することでは忙殺されていた。

ともあれ、トーンムアンはこんな風に考えたわけだ。もしも彼等がここにずっといてくれるのなら、やがては自分で答えを探し出すことができるだらう、と。

夕方、ミー村長が木片(ト)を叩いて集会のあることを知らせると、大型車に乗って来たあの連中は皆、まるで村人の仲間入りをしているかのように集まって来た。トーンムアンは、母の目を盗んで集会の様子を見に来た。自分の知りたいこと疑わしいと思っていることのすべてを知らねば

と思つたからだ。

ミー村長は、元来けつして話し上手ではなかった。だから彼が立ち上がって話したとき、いまだにおどおどして、話の辻褄はあまり合っていないようだった。トーンムアンは、それでもごく大ざっぱにはあるが、この連中は^{バング}大都會から来た学生で、学校の休みを利用して、田舎の人々の生活状態を改善させるために、わざわざ犠牲的精神を發揮してやつて来たのだということだけは分かった。が、彼等が何故そんなことをするのか、また、具体的に何をしようとしているのかは、よく理解できなかった。しかし、何はともあれ、彼等が少なくともお偉方ではないということを知つて、彼女は嬉しかった。

それから、あの若者たちのリーダーが立ち上がつてしゃべつた。彼の弁舌はミー村長よりはるかに巧みで、何事かを長々としゃべりまくるので、村人の多くは今にも眠りこけそうだった。トーンムアンがまだ聞いたこともない言葉や、時には外国語が混じつてゐるために、話の全部が分からなかったにもかかわらず、彼女はそのリーダーの話しぶりや言葉づかいにたいへん興味をそられた。彼等がなんの報酬をも求めず、ただ自らを犠牲にして勤勞奉仕にやつて来たのだということを、なんとかして村人たちに分か

ってもらおうとだけ、彼女にも分かつた。つまり、すべては國家の發展に役立ちさえすれば文句はないということらしい。この男がいったん國家ということについて語り始めると、声はかならず大きくなり、力いっぱい握りしめた両の拳を振り上げるので、村人たちは、当惑とその面白さのせいなのか、ただ領いて見つめるばかりなのだった。

村長と学校の先生方を除けば、國家などといっても、何のことだかあまり分かる人はいないだろう。學校では、わが國家の有様がどんなものであるかなどと教えられるとは、いふものの、それは小学校四年生のトーンムアン自身にもまだよく分からないことなのだ。というのは、彼女が日ごろ見慣れてゐるのは、家並と田野と水牛と水牛飼いの子供だけなのだから。もしも國家というものが、村や田野をひっくりかえした全体よりもさらに大きいものとしたら、それはどんな形をしていて、どんな顔をもっているのだろうか。

その翌日、彼等は前日の説明どおりに仕事を開始した。女子学生のグループは、土や木材を運んだりカンナをかけたりする役目で、男子学生は柱を埋めるために穴を掘る役、柱の先を削る役、その柱をノコギリで挽く役などの組に別

れた。作業をしている彼等の表情はとても明るく快活だった。互いに冗談を言ってからかい合ったりしていかにも楽しそうであった。

トーンムアンは、いまだかつてこんな風に仕事をするのを見たことがない。彼女の村で誰かが家を建てるような場合、大工さんを二、三人も呼べば充分で、彼等は真面目で積極的に仕事をするから、ほとんどおしゃべりをしないのが普通である。しかし、ここにはただ一軒の家を建てるのに、五十人、六十人もの手があるわけなのだ。そう、一軒の家といっても、それは実は家ではなく、彼等の呼び方に従えば「公民館」とかなんとかいうところのものである。しかし、この「公民館」なるものが寺の会堂（イハ）とどう違うのか、トーンムアンにははっきり分らない。ただ、彼等の説明によれば、村民が集まってレクリエーションやそれに類したことなどをやるためのくつろぎの場にするつもりらしいのだが、「レクリエーション」などという言葉が何を意味するのか、彼女にはなおさら分らない。こんな言葉がこの世に存在するということさえも思いついたことがないのだった。

ともあれ、その建物は少なくともきつと何かの役に立つはずのもののだろう、と彼女は思った。さもなくば、五十

人、六十人もの彼等が群れをなして、わざわざ遠いところから建てにやってくるはしなかっただろう。だってあの人は、彼女より何倍も程度の高い勉強をしている学生なのだし、この村の誰よりも聡明な連中に違いないのだから。

正午になると、呼び子の音が聞こえ、彼等は作業を中断してそれぞれのグループ単位で宿舎に戻った。トーンムアンは、彼等の歩きぶりまでも気に入った。彼等は、好きなように散らばって歩きながら、楽しそうに呼びかけ合ったり話し合ったりしていた。学校には男女合同の一班が食事の仕度をして待っていた。彼等は車座になって、いかにもおいしそうに昼食を楽しみ、午後にはまた仕事を続けるのだった。

夕方になると、また笛の音が聞こえた。彼等は連れ立って水浴び（アイダバ）をしに行き、それがすむと、学校前の広場に坐って話し合った。誰かが奇妙な形をした楽器を持ち出してきて奏でると、彼等は全員で、トーンムアンにはさっぱり分かりそうもない言葉で合唱するのだった。暗くなるとすぐ、彼等は祭礼用の石油ランプに火を点したので、今にもこれから何かの催しが始まりそうな気配だった。

もうこの時分になると、今まで怖じ気づいていた村の子どもたちも以前より少しは大胆になって、彼等にそっと近

づいて様子を窺うようになり、美しく着飾った娘さんたちは、彼女らと呼んで一緒に坐らせようとした。が、まだ誰もそんな勇氣がなかった。

トーンムアンは、隅の暗がりを選んで立ち、こっそりと彼等を眺めていた。彼女は、自分の着ている衣服の縫ぎにひけめを感じていた。もし何かを尋ねられでもしたら、きつとどぎまぎして答えるだろうと思うと、恥ずかしかった。彼等は皆、例外なく彼女よりもずっといいものを着ていたし、その話しぶりといったら実に見事なのだ。彼等はグループになって歌を合唱し、彼女にとっては珍しいゲームばかりをあれこれとやってゆき、そのゲームごとにかならず誰かしくじりをする者が現われ、その人は罰として何かをやらされるのであった。

トーンムアンは、こんな風変りな遊びにうち興じている彼等を見て、面白いと思った。一人の男子学生がみんなの前で女子学生の一人に求愛のポーズをとって跪かされると、皆笑った。彼女は、生まれて以来こんなにもあつかましい人間を見たことがないと思った。

それからの彼等は、思いつくかぎりの奇妙なゲームを次々とやって、ついに種切れになった。そこで例の代表が立ち上がって弁舌をふるった。しかしまあ、なんと話し好き

な男なのだろう。彼は、これまでのところ仕事は大成功だったと、いろんな形容詞を並べて語り、いつものように誇りをもって国家のことに言及するのを忘れなかった。しゃべり終ると次の者に話をする機会を与えた。

生真面目そうな男が立ち上がって、喋り始めた。声はリーダーほどよくなかったが、やはり大きくて断固とした響きをもっていた。彼は、我々（彼等のことである）はあまりにも集団をなしすぎて、村人の中に溶け込もうとしなかったきらいがある。着るものさえもかなり違っているではないか、と指摘し、さあ皆で協力し合ってこの欠点を直すようにしようではないか、と結んだ。言い終るといっせいに賛成の大拍手が沸き起こった。リーダーはまた立ち上がり、彼自身もそう思っていたわけだが、今日はまあ初日だから大目に見ておいて、今後は、やはりもっと村民の中に入り込んでゆくべきだと言った。そこで、リーダーにも同じように拍手があった。

家に帰ると、トーンムアンは、眠りにつくまでいつもより時間がかかった。まだこの村から一步も外へ出たことのない彼女にとって、すべてのことがなんと刺激的だったことだろう。眠ってもなお彼女は同じような夢うつつの中にいた。彼女はその夢の中であの連中の仲間に入り、国家の

発展を象徴するあのすばらしい家——彼女が知っているの家よりも重要な家——を建設する作業に楽しげに打ち込んでいたのだ。彼女は、同じ夢の続きの中で、あの仲間たちといっしょに大都会へ勉強をしに行っていた。もう母親に叱られる必要もなく、村で水牛の世話をしたりすることもない。彼女がこれまでに見てきたように、ただ愉快にお喋りをして坐っていればよいのである。

翌朝目がさめると、これがただの夢にすぎなかったのがっかりした。と同時に、両親や兄弟のいる村から本当に出て行く必要がないのだと知って安心した。もしも行くとしたら、大都会へはどんな話題をもっていっただらいいのだろうか、トーンムアンは考えた。そして、もしそちらに飼うべき水牛がいなかったら(4)代わりに何を飼うことになるのだろうか。

今日もまた、彼等は、昨日と同じように仕事をしていたようだ。ただ昨日と違ったところがあるとすれば、夕方になってから、彼等のほとんどが以前とは打って変った身なりをしていたということだ。男子は、これまでに村人の誰も着たことがないような、ボタンの代わりに紐で結ぶようになっている灰色の襟無しシャツを着込み、中には水浴用布(5)を腰に巻きつけている者もいて、なおさらおかしく

見えた。女子の方は、やはりこの村ではちょっと考えられないような農民ブラウスに絹の腰布をまといていた。彼等は得意げに微笑み合い、大声でこんなことを言い合っていた。「どうお？ あたし、本当の農民みたいでしょう？」トーンムアンは吹き出したくなったが、何故か笑えず、また、どうして笑えないのかも分からなかった。たぶん彼女のやさしい心に宿る一抹の憐愍の情がそうさせたのかもしれないのだが。

ともかくにも、彼等は口の悪い村人の誰かが憶測したような、鶏の糞も踏めないような人間(6)ではけっしてないということを証明し、暑い日差しも降りしきる雨もいとわず、一日中せっせと働くのであった。

遠からぬある日、「公民館」なるものの外郭ができあがってしまったら、夕方にでも彼等の誰かが親しげに家の庭へやって来て、ありとあらゆることについて話し合おうとしてくれるだろうし、さもなくば衣類やポケットブックなどを配りに来てくれるだろう。両親たちなら衣類で大喜びをするだろうし、トーンムアンぐらゐの学童なら、全種類の病氣予防法について書いてある本の挿絵などに興味を示すだろう。トーンムアンには、まだひとつだけ分からないことがある。というのは、わずかな枚数の紙に書いてあるこ

とだけで、どうしてあれらの恐ろしい病気を防げるのかということがある。このことについては、彼女はまだ誰にも聞いたことがなかったし、また、尋ねる勇氣ももち合わせていなかった。彼女は、もしもこんなことを尋ねたりしたら、それぞれの立場の人の相互の信頼関係を崩すことになるかもしれないと考えていた。だから彼女は、ただ沈黙を守ってすべてのことに満足していたというわけである。

夜が更けてしまうまで、彼等はほとんど飽きることを知らずに愉快に遊び続けていたようだ。子どもたちは、いずれそのうちに何か面白いこと、たとえばリケー芝居(7)やラムタット応答歌(8)をやってみせてくれるだろうと期待して待っていたものだが、期待外れに終るのが常であった。あの学生たちは、外国語の歌だけとはとても上手で、子どもたちには不可解なゲームをやっては、ゲラゲラ笑うのだった。

彼等のやる余興の中で、ただひとつ子どもたちがいっしょに楽しめたのは、ラムウォン踊り(9)だった。トーンムアンは、彼等がそれをやっていると喜んで見に行った。というの、それを見ていると、彼等が彼女とそんなにかけ離れていないような気がして満足するからだった。

時がどんどん過ぎてゆき、村人たちは皆、学生たちがま

るで村の一部分になってしまったかのように感じ始めている。ちょうど村人たちがそうであり、牛や水牛の群れがそうであるように。そしてトーンムアン自身もあの呼子の音が彼女の日常生活の一部分になったと感じた。毎朝あの音を聞くと、ああ、あの人たちはまた仕事を始めるのだと思い、大急ぎで母の手伝いをしに行ったりするのだった。この季節になるまで、彼女は仕事がつまらなくてしょうがなかった。が、あの連中が来て楽しそうに仕事をやり出してから、急にそういう自分が恥ずかしいと思うようになった。

ついに待ちに待った日が来た。今や「公民館」は立派に完成し、まるで巨大な怪獣のように野の中にどっしりとそびえていた。が、建物の内部はがらんどろで壁はなく、屋根とセメントを敷いた床の他に、同じセメントの床の奥の一隅を一段高くしただけのリケー芝居をやる舞台のようなものがあるだけだった。

学生たちは、誰も彼も誇らしげな面持で感心したように何度となくそれを見つめた。彼等はカメラを持って来てパチパチとシャッターを切り、偉そうな人が次々と現われては出来映えを褒めた。郡長や他のお偉い役人方、それに県知事までも視察に来た。このようなことは、彼女の村では

めったにない出来事と見て差し支えない。なぜなら、ミール村長を除いて、この村で県知事の顔を見た者はこれまで一人もなく、郡長のあのいかめしい顔が今日のように微笑んでいるのを誰も見たことがなかったからである。

夜になるときわめて盛大な祝宴が張られ、この祝宴は、村長の令息の結婚披露宴の時よりもずっと賑やかだと言う人が多かった。何匹もの豚が殺され、数多くの鶏が宴会の犠牲になった。学生たちはとても親切で、村人たちに同席するように誘ったが、村長と学校の先生以外はその席に連なるうとしなかった。というのは、村人でその場にふさわしい上衣を着ている者はいなかったし、変なものを着て列席したために郡長からお咎めの目で見られるのがいやだったからである。学生たちはそんなに期待外れだったようではなく、目の前の御馳走や自分たちグループ内の打ち解けた会話の方にいっそう満足しているように見えた。郡長は、周囲の誰よりも大きな声で村長に話しかけていた。村長は、しきりに「はい、さようでございます」ばかりを連発していたが、学生たちの方は、相変らず愉快そうにふざけ合って楽しんでた。

その翌朝には、もうあのいつもの笛が鳴らなかった。トーンムアンは、これまでずっと持っていた何か大事なものを

が消え失せてしまったように感じ、寂しい気持で母の仕事を手伝いに行った。学校の方を首を伸ばして見つめたが、まだそこに人が残っている気配は少しもなかった。すべてのことが実際の夢の中で行なわれたように思えた。

午後になって仕事を終えると、トーンムアンは「公民館」まで歩いて行った。彼女は、手でそつと真新しいセメントの床に触れてみたが、やはり夢でなかったことがよく分かった。もしも夢だったら、彼等の去った後に何も残らないはずなのだが、まさにこの「公民館」こそは、彼等が彼女に置き残していつてくれたものだったのだ。彼等はよくこんなことを言っていた。これこそは今後の村の進歩発展と切り離せないものだ、と。

だが、この建物を何に使ったらいいのかわかる者はなかった。村長自身もあまり使用しなかった。というのは、年に一度ぐらい村人を呼んで集会をするようなとき、彼がわざわざそこまで歩いて行ってくたびれる思いをするよりは、自分の家の庭を使った方が都合がよいからであり、もうひとつの理由として、もしも何かのことで頻繁に使うようになったら、せっかくの「公民館」もいたんできて、いつか郡長でも視察に来たような時にお咎めを受ける恐れがあったからである。

学校の先生自身も、やはりまだ使用したがらなかった。

先生は、いずれ新学期が始まったら、生徒たちに何かをやらせるために使うかもしれないなどと言っていた。が、今は休み中だし、先生だって何もしたくないだろうことは誰でも知っている。あの学生たちが希望と信念をもってわざわざ建ててくれたこの「公民館」は、そういうわけで、誰ひとり世話をする人もなく建っていた。時折子どもたちが入り込んで駆け回ったりしたが、床がセメントなのですぐ飽きられてしまうのだった。庭土のように掘ったりはできないし、つるつるとして足触りがいいわけでもなかったから。トタン板の大屋根は、ただものものしく見えるだけで、あまり親しみを感ぜなかった。子どもたちの他に、時には水牛の群れが強い直射日光を避けて迷い込むようなこともあったが、そんな時はよく飼育係の子どもたちが驚いたように追い駆けて来て、おかみの所有物に遠慮すること知らない大バカ者、と言って怒鳴り散らすのだった。

仕事がひまになると、トーンムアンはいつもこの「公民館」に腰を下ろしに来た。ここに坐ってあの連中のことを思い出すと、なつかしさがこみあげ、あの人たちは今ごろ大都會で何をしているのだろうか、自分たちで造ったこの建物のことをたまにはいい気持ちで思い出したりするの

かしら、などと思った。

また雨が降り、風が強く吹きつけてきた。雨が横殴りに吹き込んできたので、彼女は立ち上がり、やむをえず奥に入った。あの人たちにちゃんと四方を塞いでおいてもらえばよかったのになあ、と思った。そうすればこの建物は雨を防げる。そう、もしちゃんと覆ってさえあれば、米を保存する倉庫としても立派に使える。もしも村人たちが買値に満足しないような場合、何も急いで売る必要がなくなるわけだ。

彼女は、こんな風に考えが脇道に逸れていつてしまっているのを、残念に思った。しかし、彼女はこうしたあの学生さんたちよりもよくものを知ることができるようになるというのだろう。ともかくこれが「公民館」であってこそ国家が発展するのだろうし、そもそも米倉などが国家の発展とどのようにかわり合うというのだろう。何年経っても彼女の村がこんな状態でしかないのは、村人が稲を植えつけることにだけ夢中になっているからではないのだろうか。

風雨は弱まった。が、彼女の心の中の嵐はおさまりはしない。トーンムアンは急に寂しくなった。目頭に透明な涙が出て脹れあがり、ついにあふれて頬を伝い、今やぼんや

りとかすんで見えるだけのセメントの床に滴り落ちた。

2 人には頼らず

マイトリリー・リムビチャート

愛してもいない女と話をするとき、僕はあがつたりもせず気楽に喋ることができ、時にはよくもまあと思えるほど弁舌さわやかになってしまふ。ところが、僕が今すっかり夢中になっているラーニー嬢に何か一言でも話しかける段になると、これはまたどうしたことだろう、言葉が喉の奥に引っかかってしまい、胸が早鐘を打ち始めるのだ。いつまでたつても言葉が出て来ないということもあり、我ながら自分に愛想がつきてしまふ。他の人も僕のようになることがあるのだろうか。

僕とラーニー嬢が二人つきりでどこかへ出かけるようなことが何度も重なると、やはり慣れてきたせいなのだろう、当初の落ち着きのなさは次第に消え、ついにはすっかり平気になってしまった。

ところがどうだろう、これはやはり、どうにもならない

わが悲しき性さがともいうべきか、ラーニー嬢に慣れてしまふと、今度は彼女の両親に接するとき、まったく同じようなことになってしまったのだ。

僕はそのお二人と顔を合わせるのが、どうも苦手なのだが、なにしろ娘のラーニーを好きになってしまったわけだから、どうしても彼女の家まで訪ねて行かねばならず、その度にまたもや激しい胸騒ぎを覚えるということになる。

僕とラーニー嬢は実によく理解し合っている。だから、もしも僕に何らかの心配事があるとすれば、それは彼女の両親についてのことでだけである。というのは、僕はお二人に気に入られているのかどうか自信がないからだ。そこである日のこと、ラーニーにこんな探りを入れてみた。

「ラーニーさん、真面目に訊きたいんだけどさ、君のお父さんやお母さん、僕を嫌ってやしない？」

「いいえ、そんなことないわ」と彼女が答えた。

「じゃあ、僕のこと何か言ってた？」僕はもっと詳しいことを知リたかったのだ。

「母はね、あなたの人相がいいって言ってるわ。母は中国人で、人相を見るのが好きなのよ」

「どんな風にいいの？」僕は不思議だった。

ラーニーは愛らしく笑ってから、答えた。

「あなたのおでこがきれいなんですって、今に立派なお店を持つようになるって」

「おでこがきれいだって、どんな風に？」

僕は何が何だかさっぱり分らず、自分の顔立ちのことを考えようとした。

「額が広くてきれいなんですって。中国人はおでこの広い人が好きなのよ」

「じゃあ、頭の禿げた人がいいの？」

「そのとおりよ」

ラーニーは、くすくす笑いながら横目遣いに僕の額を見た。僕は急に恥ずかしくなり、額が火照るのを覚えた。

「それで、君のお父さん、僕のこと何か言っていた？」

僕は質問を変えてみた。

「父はね、あなたはいいとこばかりだけど、ただひとつ欠点があるんですって」

「えっ、どこが悪いって？」 僕は焦れたい気持ちで、こう突っ込んだ。

「父が言うには、あなたが家へいらっしゃるとき、いつもお酒の匂いをするんですって」

「いやだなあ、だってさ、僕アルコールが入っていないと訪ねて行く勇気が出ないんだよ。行っても黙って坐ってい

るだけで、何も口から出て来やしないんだ。だからお酒の力を借りたってわけさ」

「いったい何が恐いの？」 彼女はさっぱり分らないという顔をした。

「君のお父さんが恐いんだよ」

「何も恐がることなんかないわ。父はあんなに恐そうな顔をしていても、心の中は実は優しいのよ」

「本当は恐くなかったんだけどさ、何か間違った言葉遣いをするんじゃないかと心配だったのさ。僕は遠慮してるだけなんだ。いろんなことが気になってね。嫌われやしないかと思ったり、もしかしたら僕は役不足で、君に釣り合わないのじゃないかと思ったり、とにかくいろんなことを考えちゃうんだよ」

「そんな風にまで考えちゃったらやりきれないわ。ねえ、これからは何も考えないでね。お願いよ。お酒の力を借りて何かをしようなんてこともおやめになって。男性なら、もっと御自分に自信をもってくださいじゃなくては」

「うん、そうするよ」僕は約束した。

僕がラーニーを愛するようになってからも、彼女の勤務先や余所の男たちが大勢、彼女に言い寄ってきているのを

僕は知っていた。皆それなりに立派な若者ばかりだった。

が、僕が有利だった点は、僕の方が彼等の誰よりも先客だったことで、何よりも重要なことは、彼女が僕を愛しているに違いないということだった。しかし、今時の人間の愛なんてものは、どこが信じられるというのだろう。といっても、それは僕が彼女を見下しているからではなく、これから變つていこうとしている社会そのものを僕が輕蔑しているからなのだ。だから、人をあまり信用せず、早回りをして一刻も早く彼女を独占しなければならぬ。

このように考えたとき、僕がまずやらなければならぬことは、ラーニー嬢に結婚を申し込むことだった。

さて、実際に言い出してみると、彼女は快く肯いてくれた。が、まずはこれまでの慣習にしたがつて、しかるべき年長者（一）を差し向けて正式に求婚の手續きを取つてほしいと彼女は言った。

最初のうちは、勤務先の上司にお願いして仲人を引き受けてもらおうと思っていたが、いろいろと差し支えがあつたので、僕は、自分自身でその役をやる決意をした。これだけのことならなにも難しくはない、と僕は思った。それにしても我ながらずいぶん度胸が出てきたものだ。

ラーニーの父親に娘を貰いに行こうと決意した日、僕は

実際になんら儀式めいたことをしなかったし、誰とも会う約束をしておかなかった。もし肝心のお父さんに会えない場合、また出直してもいいと思っていた。

未来の義父ともなるべきその方と対面して坐ったとき、僕はこれまでになく興奮していた。が、ラーニーへの愛情が軋り立てたのだろう、僕は思い切つて口を開いた。

「お父さん」僕はいいチャンスだとばかりにこう呼びかけてしまったのだ。

「何の用事だね、ノバドン君」

父親は眼鏡を外すと、鋭い目つきで僕を睨んだ。

「僕はラーニーさんを愛しています」

僕はかすかに声を震わせながら、本音を吐いた。

「知ってるよ」父親の声は、まるで唸っているかのようにだった。

「今日こうしてやって参りましたのは、実はお父さんにお願いがあつたからです」

「何のことだね」

「僕はラーニーさんと結婚させていただきたいので、お願いにあがつたのです」

「馬鹿！ そんなに重大は用件を、よくも本人の口からぬけぬけと言えたものだ。どうして仲人を立てて話をしに来